

二次元ドリーム文庫／PDF立ち読み版



小説 竹内けん

挿絵 Hiviki N

登場人物紹介

Characters



グロリアーナ

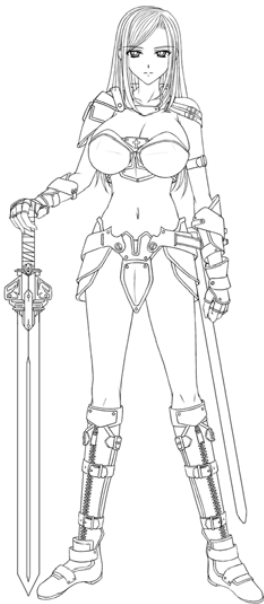
名門貴族家から王妃の座を経て女王になった優雅な美女。豊熟した肉体を持つ未亡人。

フィリックス

王国の騎士になることを夢見る騎士見習いの少年。ウルスラの下で修行を積んでいる。

ウルスラ

銀色の鎧を纏う凛々しき女騎士。騎士団の小隊長。長身で引き締まった肉体ながら巨乳。フィリックスの幼馴染みで、上司。



ルイーザ

グロリアーナに仕えるメイド長。常に沈着冷静で、知性的な美貌の持ち主。

第一章	さらば遠き日
第二章	聖母の魔性
第三章	新生活
第四章	謀反
第五章	森と湖
第六章	大浴場

湯船から上がった騎士団長は、木で作られた小さな椅子を用意して見習い騎士を促す。

「どうした？ 遠慮をするな」

「はい」

騎士団長には逆らえない。そういうふうには教育されてきたのだ。

それに女が堂々としているのに、男がウジウジしているのはみっともない、と意を決したフィリックスは、湯船から立ち上がった。

水の抵抗を受けた勃起が半瞬遅れる。

下腹部にパチンッとあたり、そのあとビヨンビヨンと滑稽なほどに跳ね回った。

その光景をウルスラは目にしたはずだが、なにも言わない。ただ椅子に背を向けて座らせると、糠袋ぬかぶくろでゴシゴシと背中を洗い始める。

「華奢な背中だな。もっとご飯をしっかりと食べなさい」

「……はい」

「しかし、しなやかでいい筋肉ではある。そうか、あの小さかったフィリ坊も、大人になったものだ」

背中を洗い流しながらウルスラは、母のように、姉のように、感慨深く語る。

「明日からおまえは一人前の騎士として、わたしのもとから巣立つことになる。ちょっと寂しいな。これは親が子供のひとり立ちを見送る心境なのだろうな」

感傷的になった女騎士は、子飼いの少年を背後から抱き締めてきた。

(せ、背中にあたっている。ウル姉のおっぱい)

全神経が背中に集中する。湯着の胸元がはだけた状態のまま抱きついているのではあるまいか？

質感が布ではない。石鹸でヌルヌルしながらも、ぴとつとくつつく感触は、女の柔肌のよくな気がする。

それにコリコリとしたふたつの野苺の存在までわかるのだ。

いつものことながらウルスラはフィリックスのまえでは、性的に無防備だ。それは異性として見ていないということの表れなのだろう。このようなことをされたら思春期の少年がどうなってしまうか、まるで思いを巡らせていけないのだ。

「……っ」

緊張にいろんなところがガンガンに硬くなってしまう少年の背中に、しばし抱きついていた女騎士が離れた。

「よし、今度はまえを向け」

「えっ、いいよ」

「遠慮するな。全身をくまなく洗い清め、おまえは生まれ変わるのだ」

恥じ入る少年は抵抗したが、横暴な上司に敵うはずもない。強引にまえを向かされてし

まった。

至近距離での対面である。お互いの膝が邪魔だったものだから、フィリックスは開脚させられ、その間にウルスラの閉じた太腿が入った。

当然ながら、少年のギンギンに勃起しているものが、女騎士の視界にそそり立つ。

ウルスラは軽く目を見張るが、それを無視して、糠袋で少年の首から肩、腋の下、胸、足と洗っていく。煩わしく感じたのか、彼女はもうペロンと捲れてしまう胸元を隠そうとはしなかった。すわなち、ちよつと手を出せば触れられる位置で、乳首が勃起した生乳が踊っている。

触りたいという衝動を、一生懸命に抑えているうちに、彼女の手が逸物のまえで止まった。

「……」

硬質な顔のまま、無言で生殖器をじっと見つめている。

限界まで勃起した逸物の先端からは、射精していると見まごうばかりの勢いで、先走りの液が垂れ流されていた。

羞恥と、怒られるのではないか、軽蔑されるのではないか、という戦々恐々とした思いに耐えられず口を開く。

「ごめんなさい。でもウル姉が……」

「いい、男とはこういうものだ」と聞いている」

案に反してウルスラは微笑を浮かべた。

「ここが大きくなるということは、フィリ坊も大人になりつつあるということだ」
平静に、いや平静さを装いながら騎士団長は、少年の逸物に両手で触れてきた。

「ウ、ウル姉……」

急所を温かい手に包まれてしまった少年が、動揺もあらわに窺うと、美姉の暗褐色の瞳には明らかな揶揄の色が浮かんでいた。

性的な興奮で視野が狭窄していたフィリックスは、自分のことではいいいっばいで気づかなかつたが、彼女とて相手のことを観察していたのだ。

少年が食い入るように自分の透けた裸体を見つめていたことなど、とうに承知している。第一、男の発情ほどわかりやすいものはない。男根がギンギンに痛々しいまでに勃起しているのだ。

怒るのも可哀想だと考えて、少しぐらい見せてやろうという軽い気持ちでいた。また、子犬の如き純真さで、一途に慕ってくる少年を、少しからかってやりたい気分もないではない。

「うふふ、幹は硬いのだな、ガンガンだ。しかし、袋のほうは柔らかく、ひんやりとしている」

フィリックスの逸物は、取り立てて巨根でも、短小でもない。年相応といったところだが、大人の女の目から見れば、男性の象徴というよりも、まだまだお子様のおちんちんにすぎない。

得物を持たせれば、無双の強さを示す女騎士の手が、少年の得物を握り締めて、感触を確かめるように撫で回す。

猛り狂っている逸物を女の柔らかい指に包まれるのはなんとも心地よい。しかし、同時になんともいえない高ぶりが、いまにも噴火しそうで、恐ろしかった。

「すごいな……」

急所を弄ばれて身悶える少年の姿がかわいくて仕方がないといった表情を浮かべるウルスラだが、その目はピンク色に紅潮し、瞳に狂気を宿している。

彼女自身もこれはちよつとやりすぎなのではないか、と思わないでもなかったのだが、相手はまだまだ幼い。変に性的なことを考える自分が、かえって恥ずかしい行為に思えて、意図的に普通に振る舞おうと努力していた。

年若い童貞少年、すなわちフィリックスなどは、つい女性を神聖視してしまう傾向がある。

すなわち、性欲や性的な好奇心などあるはずがない、という思い込みだ。実際、凛々しくも気高い戦女神然としたウルスラは、そういう勘違いを誘発させるには、十分な外見と



性格をしていた。

しかし、健康な動物である以上、興味が無いはずがない。

いくら子供のものとはいえ、はじめて手にする男性器をまえに、恥ずかしくて顔から火が出そうであったが、かわいい従者の大切な儀式である。手を抜くなどということは彼女にはできなかった。

熱い指先が、肉袋のシワから、裏筋にいたるまで、丁寧に洗い清める。

「皮を被っているな。こういうオチンチンを包茎とって、お子様の証なのだそうだ。おまえ自分で剥いたことはあるのか？」

「い、いいえ……」

「では、わたしが剥いてやろう。感謝するとよい」

ウルスラの本人的な感覚では、あくまでも見習い騎士の少年の身体を隅々まで洗い清めてやろうという、騎士団長としての義務感の発露にすぎない。恥ずかしくて頬が火照るが、やらねばならないことに思えたのだ。

一方のフィリックスは必死に我慢していた。自分の身体になにが起ころうとしているか把握していないが、それだけはいけないと本能が訴えるのだ。まるで体内で炎竜が暴れまくっているかのようだ。自然発火しそうな全身から汗が噴き出し、思考は真っ白になにも考えられない。ただ熱い吐息を吐いているだけで、なすがままである。

泡だらけの指先が、男根の先端の皮を剥いていく。

「痛いっ！ やめて、ウル姉……」

「大丈夫、大人の男になるための試練だ」

苦痛の声を上げる少年の意志などお構いなしに、瞳を狂気に輝かせた女騎士は力任せに、メリメリッと剥き上げた。

「はあ、はああああ……!!」

「痛いのか？ 我慢しなさい。やがて慣れるだろうから……」

赤剥けた亀頭をズル剥けにされ苦悶の声を上げる少年の姿に、瞳が爛々と輝いている。

「明日からおまえも一人前なのだ。剥いて癖をつけておくのだぞ」

生まれてはじめて外界に顔を出した亀頭には、白い粘着質のものがたくさん付着していた。

「ここも清潔にしないといけないな」

あくまでも寄親としての義務感と自らをだます美姉は、少年のもっとも敏感なところにお湯をかけ、指先で丁寧に洗い清めた。パンパンと張り詰めた亀頭は、綺麗なピンク色の地色が出てくる。

「はあ、はあ、ウ、ウル姉……はあ、はあ……もうやめて。ぼく、ぼく、もう、もう……」
「どうした？」

「お、おしっこ、おしっこが出そうなんだっ！」

「おしっこ？」

痛いのか、気持ちいいのか、フィリックスにはよくわからなかったが、なにかが限界にきたことだけはわかった。女騎士の手の中で男根がびくんびくんと脈打つ。

「ウル姉——ッ！」

断末魔の絶叫と同時に、ビュ——ッ！と水鉄砲が飛んだ。

それはお小水のような、いや、放尿などよりも遙かに勢いが強い。

大人の男がジャンプしても届かないであろう天井にまで届く。その物凄い勢いのままウルスラの頭上から顔面や乳房、さらには濡れ透ける湯着に包まれた腹から股間へと降り注ぐ。

「こ、これは……」

呆然とするウルスラの手の中では、当初の勢いこそなくなったものの、逸物はビクンビクンと脈打ち、精液を吐き出し続けていた。

狭い浴室に、むっとするほどの若い牡の匂いが充満する。

「はあ、はあ、はあ……」

フィリックスに返事はできなかった。ただ荒い呼吸をしているだけである。

やがて射精は終わった。逸物は小さくならず、雄々しく勃起したままだが、液体の吐瀉

は止まる。

そこでウルスラは手を離す。そして、その精液塗れまみの手を恐る恐る眼前に持っていき、しげしげと観察した。

白い精液にところどころ黄色いものが混じっているのは、おそらく尿である。

「しや、射精なのか？」

ここに至って、ウルスラはようやくやうやく事態を理解した。自分は弟とも思いかわいがつていた見習い騎士を精通させてしまったのだ。

二十代半ば近くになっても、男っけもなく、性欲など厳しい訓練で発散させてしまっていた男勝りの女ならではの重大失敗である。

「っ!？」

ウルスラはまるで憑き物が取れたかのように、表情を一変させた。

少年を射精させ、その精液を浴びたことで、我に返ったということだろう。

冷静に考えれば、一緒に湯船に浸かり、透ける裸体や、肩紐を外してあらわたくなった胸元を見せてやるのは明らかにやりすぎだ。まして、背中から抱きついて、乳房を押しつけるなど言語道断。逸物を弄び、包皮を剥いてしまうなんて、立場を利用した犯罪である。

「すまぬ。おまえがいつまでも子供だと思っていた」

白い硬質な顔といわず、全身から火が出そうだった。いまさらながら濡れ透ける裸体を

手で隠す。

ふたりが男と女であることをはじめて自覚したのだ。

「なんで謝るの？ ぼくのほうこそおしっこ浴びせちゃってごめん。……でも、すごく気持ちよかったんだ」

「おしっこではない。精液だ。おまえの身体が大人である証だ」

左手で股間を、右腕で両の乳房を隠しているウルスラは顔を背ける。

さっきまでは平気で摘み弄んでいた逸物を、もはやまともに見ることができない。堂々として凛々しい女騎士の顔はどこにもない。ただの女がそこにいる。

無様に精液を撒き散らしたまま放心しているフィリックスは、いまならかねてからの願望が叶うのではないかと思った。

「ウル姉。騎士叙任のお祝いをおねだりしていいかな」

「なんだ？ おまえはわたしの弟のようなものだ。できる限りのことはするぞ」
ぶっきらぼうに応じる美姉を、少年は恍惚と見つめる。

「……あの、ウル姉、ぼくにセックスを教えてくれない」
「なにっ!？」

ウルスラは目を剥く。

「大人になつたらすることなんですよ？」

「もう打ち止めとは失礼ではないか。ここにはまだまだ女がたくさんいるんだぞ」

「でも、さつき、ウル姉の中で三回……」

このお姉さんは、基本的に体育会系であり、負けん気が強い。困惑するフィリックスにさらにルイーズの声が浴びせられる。

「殿下の年頃では一日十回ぐらいまでは無理なくできると聞いております」

「なんだ、まだあと六回もできるじゃないか」

「十回って、そんな……無理、死んじゃうよお」

嗜虐的な笑みを浮かべたビキニアーマーの女騎士に怯えてあとさったフィリックスの背中に、ポヨヨンとした柔らかい肉球があたった。

「殿下、おなごに背を向けてはいけませんわ」

「ル、ルイーズ……」

前門の虎、後門に狼とはこのことである。

臙脂色のエプロンドレスが汗と湯気によって身体に張りついていているルイーズの両手がまえに回り、フィリックスの衣装を脱がしていった。そして、まるで女の胸を揉むように、フィリックスの胸を撫で回し、乳首を摘んだ。

「うふふ、殿下の乳首がコリコリですわね」

背中に巨大な肉塊の感触を感じながら、なぜか尖ってしまった男の乳首を優しくこね回

される。くすぐつたいが気持ちいい。

身動きの取れないフィリックスの前面に、ウルスラが歩み寄ってきた。

「ウ、ウル姉、こ、これは違うっ」

「なにが違うのかな」

ウルスラは胸鎧を外した。鎖骨のすぐ下から盛り上がった美しい半球の乳肉が現れる。大きさでは、グロリアーナやルリーズに負けても、形のよさは負けていない。

すごい綺麗なおっぱい、と思つたが、このときばかりはフィリックスも喜ばなかった。

恐ろしい女騎士の顔に浮かぶのは満面の笑み。ただし、こめかみに青筋が浮かんでいることを見逃すほど、少年は能天気ではなかった。

逃げられないように少年の両肩を抱いたウルスラの顔が近づいてくる。そして、唇が重なった。

「んっ、んん……」

これはわたしのものだ、という所有権を主張するような食るようなキスである。

凜々しいお姉さまの舌が、唇をチロチロと舐め回し、唇を吸い取るようなキスを楽しみながら、身体の前面をぴったりと合わせてきた。胸板で美乳が型崩れする感覚が気持ちいい。

それに気づいたルリーズは、自ら臙脂色のエプロンドレスの胸元をはだけた。そして、

背中を押しつけてくる。

胸板には美乳、背中には巨乳。なんとフィリックスの身体は、前後から女体によってサ
ンドイッチにされてしまったのだ。

ふたりの美女は対抗意識丸出しである。少しでも密着面を増やそうと身体をくねらせな
がら押しつけてくる。

ウルスラの濃密な接吻が終わると、休む暇もなく後ろからルイズの唇が重なってきた。
少年の口内に溜まっていたウルスラとフィリックスの混じり合った唾液に、さらにルイ
ズの唾液が混じる。少年の口内では収まりきらない粘液が唇から漏れ、顎を濡らして滴
り、ウルスラの胸にかかった。

むつときたららしいウルスラは、ふたりのキスに強引に割り込んでくる。ふたりは同時に
少年の口を吸い、激しく舐め回してきた。

フィリックスの舌は引きずり出され、ふたりの美女に交互にしゃぶり上げられ、争って
口唇を食られた。

「ああ……」

ようやくふたりの口が離れたとき、熱く甘い吐息から解放されたフィリックスは、思わ
ず恍惚の溜息をついた。

しかし、お姉さまたちはまだ満足していなかった。ルイズの舌が右耳を舐めると、ウ

ルスラの舌が左耳を舐める。

右頬と左頬、右脛と左脛、左右の鼻の穴まで柔らかい舌で舐められた。

少年の顔は美女たちの熱く濃い唾液によって完全に塗りつぶされる。

(なんだか、ふたりに食べられていたみたいだ)

柔らかい女体に包まれる心地よさに陶醉したフィリックスは、なにも考えられなくなつてしまい、このままふたりに食べられてしまつても本望という心境になつていた。

女たちの温かく濡れた舌先は、さらに首筋から腋の下といったところも舐め回す。前面のウルスラは、左右の乳首を吸い、裏面のルイズは背骨や肩甲骨を舐めた。

上半身を唾液塗れにしたふたりは少しずつ下がっていく。フィリックスのまえで跪いたウルスラは、いまだグロリアーナとの一戦の余韻の残る逸物を手に取つた。

愛液と精液、そしてお小水のたつぷりとかかつた萎んだ男根。それを肉袋まで含めてすべて女騎士はパクリツと啜えてしまつた。

少年は逸物を嘔み切られてしまうのではないか、という恐怖に駆られたが、そこまで非道なことはされなかつた。

「んむっ、んんっ」

萎んでいる逸物が女の口唇の中で、ちゅうちゅうとしゃぶられ、舌鼓を打たれた。

小さくて柔らかい男性器が、トロトロの濃い女の唾液の海で溺れている。舌先で転がさ

れ、金玉が吞まれてしまいそうだ。

「はあ〜……」

フィリックスは、情けない悲鳴を上げて身悶える。

逸物に少しずつ血液が戻っていき、やがて大きくなる感触を口内で楽しみながら、上目使いになったウルスラの目が優越感の笑みを湛えた。

それはフィリックスに向けられたものではない。その頭上から見下ろすルイーズに向けられたのだ。

むっときたらしいルイーズは乳房を押しつけたまま、下に滑らせた。接吻が首筋あたりから、背筋を通って下りていき、最後に到着した場所、そこはお尻だった。

少年の小さく引き締まったお尻が左右に割られた。

「ちよっと、ルイーズなにを！」

「殿下、じっとしててくださいませ」

ライバルとの対抗意識と自らのうちなる興奮に燃え上がったルイーズは、少年の肛門の左右に親指をあてがい、熱く潤んだ瞳で見つめている。

唾液に濡れた舌が伸ばされ、かわいい肛門を舐め始めた。

「ああ、ああ、やめて、やめてえ……」

このようなとき上げる悲鳴には、男女差はないらしい。フィリックスはまさに女の子が

肛門を舐められているかのような、かわいらしい悲鳴を張り上げる。

それは少年愛嗜好の女たちの性欲を否応なく高めずにはおかない。

ルリーズは、少年の尻朶の感触を顔全体で楽しみながら、夢中になって肛門を舐め直し、ついには舌尖を尖らせて、ほじくるような真似までしてきた。

「くうくう……」

男としてなにかを失ってしまいそうな不安感。それとは裏腹な脊髄をゾクゾクと悪寒のように走る快感を受けて、フィリックスの逸物は復活していく。ウルスラの口内でどんどん膨張率が上がり、ついには入りきらなくなってしまう。

フェラチオ初体験中の女では捌き方がわからず、喉奥を突かれてしまった。

「げほっ、げほっ、げけっ……」

逸物を吐き出したウルスラは、涙を浮かべて苦しそうに咳き込む。

「大丈夫、ウル姉？」

「ええ、ちよつと驚いたけど」

ウルスラの目の前では、彼女の唾液によって濡れ光る男根が、雄大にそそり立っている。それがさらに振り返った。

「あ、やめてルリーズっ！」

幼馴染みのふたりの親密さを感じたルリーズは嫉妬に駆られたのだろう。肛門に差し込

んだ舌先を、グリグリと回転させてきた。

悶える少年の姿に対抗心を刺激されたウルスラもまた、改めて男根を啜えてきたのだ。

「ひっ、ウル姉まで」

ウルスラは男根をジュルジュルと啜り、ルイズは菊座をペチャペチャと舐める。このお姉さまたちの濃厚な責めに、ただ翻弄されるしかなかった。

「くああ！ あああああああつ！」

悶絶の声を上げた少年は許容できる快感のレベルを超えてしまった気がする。このまま続けられたら廃人になってしまいそうだ。

そうこうしているうちに、フィリックスのまえに新たな人影が立ち、顎を捉える。

「ああ、わらわのかわいい坊や。感じているときの顔がほんとかわいいわ」

「ああ……義母上……さま……」

「うふふ、わかっているの？ ルイズもウルスラも、我が国を代表する女傑なのよ。その辺の男なんか声もかけられない高嶺の花なの。そのふたりを早くもこんな肉奴隷にになってしまうなんて、末恐ろしいわ。……もちろん、わらわも坊やの肉奴隷よ」

うっとりとした表情のグロリアーナは、ふたりの女の唾液によってドロドロになってしまっているフィリックスの顔に、唇を近づけてきた。

「うう……」



義母との濃厚な接吻をしながら少年は心の中で抗議した。

(……絶対、肉奴隷はぼくのほうだ)

前任ふたりの唾液を搾り取るように、女王は唾液を啜り飲む。

下半身のほうでは、ウルスラは尿道口に舌を突きたてて、ほじくっていた。ルイーズは肛門に舌を半ばまで入れてしまっているようである。

女臭に包まれながら、フィリックスの脳裏でなにかが焼ききれた。腰が砕ける。

まるで立ち木が倒れるようにして、脱力していくフィリックスを、三人の美女たちが優しく支え、そのまま仰向けに大の字の形に寝かせてくれた。

三匹の淫牝のまえに一本の肉棒が佇立している。

万人が認める美女たちの間に、火花が散った。最初に動いたのはグロリアーナである。

彼女はなんと、義理の息子の顔を跨ぐと、シックスナインの体勢になり、さらに豊麗な乳房を抱きかかえ、肉棒を挟んでしまった。

「うふふ、わらわは、まえからこうやって楽しみたかったのよ」

ふっくらもちもちした肉乳の中で猛り狂う男根が踊る。

「わあ……」

自らの精液が詰まった女唇を眼前にして、フィリックスは悲鳴を上げる。

セックスを楽しんだ直後の陰部を、男の顔面に押しつけるなど普通の女にはなかなかで

きない。

しかし、一度、禁忌を犯したことで恥女として吹っ切れてしまい、どこまでも自らの欲望に忠実に行動しているのだろう。

その淫乱女っぷりにあてられながらも、他の女たちは引き下がるつもりはなかった。

「陛下、独り占めはいけませんわ」

ルリーズの抗議に、グロリアーナが不思議そうに首を傾げる。

「あら、あなた。わらわに逆らうの？」

忠誠心と欲情の間に板ばさみとなって絶句した赤い侍女を、銀色の女騎士が援護する。

「男と女の間には主従は関係ありませんまい」

「はい、たしかに。この身も心も陛下に捧げたルリーズですが、フィリックス様を独占することだけは許せませんわ」

王家に絶対の忠誠を誓っているウルスラと、女王個人に絶対の忠誠を誓っているルイズ。いまここでグロリアーナが男根を独占したら、ふたり揃って謀反を起こしそうな目をしている。

一本の男根のまえには、女たちの忠誠など風呂場におけるカキ氷よりも儂い存在であるらしい。

それと察した女王が妥協した。

「しかたないわね。なら、あなたたちも同時にどうかしら？」

女王の優雅な提案に、ふたりは戸惑ったようだ。しかし、恥女に対抗するには、自らも恥女にならざるをえないとでも結論に達したようである。なんと臣下ふたりもそれぞれうつ伏せとなり、自らのおっぱいを手に取り、右からウルスラ、左からルリーズが肉棒を挿んできた。

「うわ……そんな……」

義母の乳房だけでも十分すぎるほどに気持ちよかったのに、教育係と憧れのお姉さんの乳房まで加わったのだ。驚いたフィリックスは反射的に身を起こそうとしたが、三人の乳房が乗る下半身を動かすことはできなかった。

上から見下ろせば、男根を中心として、三方に向かって、美しい女性がうつ伏せになっているのが見えただろう。

三重パイズリというのだろうか。一本の肉棒に合計六つの乳房が押しつけられ、揉みしだかれる。この世のものとは思えないほどに気持ちよかった。

世間では貞淑な未亡人として知られた女王と、男勝りで知られた女騎士と、男など歯牙にもかけない才媛として知られた侍女頭。だが、その正体はみんな意馬心猿の淫乱女たちである。その三人による意地と矜持でしのぎを削った熱烈な奉仕だ。

「はあ、はあ、はあ……」

目前で踊る男汁溢れる女性器に、フィリッククスは特に奉仕しなかった。グロリアーナとしても、自らがパイズリをしていることに夢中で、余計な刺激は欲しくないようである。そこでヒクヒクと収縮しながら、白い泡を吐いている赤貝を見やりながら、男根を挟んでむにゅむにゅと潰し合う乳房たちを窺った。

大きさでいえば、グロリアーナ、ルリーズ、ウルスラの順番だが、張りという意味では逆になる。その証拠に臣下たちの乳房に押されて、女王の乳房はかなり型崩れしている。乳輪の大きさも乳房の大きさに比例しているようだ。色はルリーズが一番鮮やかなピンク、二番目はウルスラ、グロリアーナが一番薄い。

グロリアーナが勝っているときはひたすら柔らかい肉に包まれ、ルリーズが勝っているときには弾力が増し、ウルスラが勝っているときには、ちよつと物足りない。

(ウル姉も悪くないんだけど、やっぱり大きいほうが気持ちいいや)

ウルスラ鼻屑のフィリッククスだが、やはりこうやって直接違いを確かめると、認めざるをえない。もちろん、物凄く贅沢なレベルでの優劣である。

しこりたった乳首が互いに擦り合ってしまったらしく、三者ともに吐息がどんどん熱くなっていく。

だからともなく唾液を垂らし始めた。それによってすべりがよくなったが、女たちは無意味に張り合って、多くの唾液を垂らしたものだから、三者の谷間はドロドロの沼地の

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>